

第22回 2023沖縄シンポジウム—沖縄とともに  
—慰霊の日を迎えて—

人権擁護委員会 沖縄問題対策部会 委員 寺崎 昭義 (24期)

## 1 はじめに

6月23日、この日は「慰霊の日」である。

沖縄住民約94,000人とほぼ同数の日本兵の犠牲を出した第2次世界大戦末期の沖縄戦は、1945（昭和20）年6月23日、日本軍の組織的戦闘が終了したとされている。

この日を「慰霊の日」と定め、沖縄県は、沖縄全戦没者追悼式を糸満市摩文仁の平和祈念公園で行っている。

「鉄の暴風」といわれた米軍の砲爆撃などで当時の沖縄県民の2割以上の民間人が犠牲となっている。

辺野古新基地建設の強行・南西諸島の軍事要塞化の動向など、政府は、ふたたび沖縄県民に犠牲を強いようとしている。

沖縄の「慰霊の日」の翌日、2023（令和5）年6月24日、戦争の記憶を風化させないこと、住民が戦闘に巻き込まれ多くの犠牲者を出した沖縄の歴史をテーマに、標記のシンポジウムが開催された。

2 戦世いくさゆを生きる人々の声を聴く

第1部は、元沖縄タイムス記者、ジャーナリストで沖縄戦後史研究者の謝花直美さんが、「戦世いくさゆを生きる人々の声を聴く」と題する講演をされた。

謝花さんは、前日の「慰霊の日」を迎えた沖縄の話からはじめ、黎明の塔、魂魄の塔、平和の礎でのメディアがつくる喧噪と「有事」に備えるという考え方が浸透し軍事が影響する領域が生活の中に広がっている沖縄の現状について話された。

次に、謝花さんが取材された、第2次世界大戦下の沖縄で治安維持法違反で逮捕された沖縄教育労働者組合事件、大宜味村革新運動、社会運動勉強会参加者の「証言」について語った。

また、沖縄戦時、浦添村の防衛隊員の妻の「米軍を上陸させ長期間押しとどめ兵力を消耗させる」との日本軍の「出血持久作戦」で動員された夫の話や渡嘉敷島の「集団自決」（強制集団死）を生き延びた女性の証言などが紹介された。

更に、アメリカ統治下の朝鮮戦争時に、米軍の灯火

管制訓練に従わなかった琉球大生の証言などについても話された。

謝花さんの講演について、藤川はじめ元部会長が、沖縄戦体験者が減少している中で、沖縄戦の記憶を今後とも共有していくために必要なことや集団自決（強制集団死）を否定する人々についてなどの質問をした。

## 3 南西諸島の軍事要塞化の現状

第2部は、元朝日新聞記者でジャーナリストの川端俊一氏が、南西諸島の軍事要塞化をめぐる現状を講演した。

同氏は、今年3月6日、沖縄県石垣島に陸上自衛隊石垣駐屯地が開設され、市民らの反対のなか、地対艦誘導弾、地対空誘導弾などのミサイルが搬入されたことを巡って先島の民主主義が揺らいでいる現状を話された。

次いで、馬毛島の米軍艦載機の離発着訓練など沖縄のみならず、南西諸島の島々で地方自治と民主主義が踏み荒らされ、南西諸島の島々が次々に軍事要塞化されていると話された。

そして、これらはアメリカの対中国作戦構想に基づくものであり、中国との武力衝突を想定した日本とアメリカの「軍事一体化」が進んでいる現状を指摘された。

同氏の講演に対し、神谷延治部会員が、「揺らぐ先島の民主主義」、「『要塞化』する島々」、「日本とアメリカの『軍事一体化』」などについて質問をした。

## 4 シンポジウムを終えて

参加者からは、「沖縄の人からの視点と政治からの視点で構成されていて違う方面から沖縄について考えさせられた」、「本土にいると見えにくい、沖縄の人々が再び戦争に組み込まれることへの危機感を強く持っていることが強く伝わった」などの感想がよせられた。

また、シンポジウムには千葉県市川市の高校の教諭及び生徒10名が参加し、「これから沖縄について学ぶ若者の当事者として今回のシンポジウムを聴いた。今後の沖縄についての問題を考えるうえでとても貴重な土台となった」との感想もよせられた。